

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2490500564		
法人名	株式会社レモンの里で暮らす会		
事業所名	グループホームレモンの里		
所在地	三重県津市神納418-1		
自己評価作成日	令和4年4月1日	評価結果市町提出日	令和4年7月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2490500564-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	評価認証推進機構株式会社
所在地	510-0947 三重県四日市市八王子町439-1
訪問調査日	令和4年4月 10 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「健康とオープン」を基本理念とした自由で豊かな暮らしの実現を目指します。ガーデン等の果樹・花・野菜で季節を感じ、入居者が生き生きとした健康的な暮らしが出来る環境を目指します。ひとり一人の出来る事を大切にし、入居者が可能な限り自分らしさを表現することが出来る環境を作ります。看取り期は本人・家族・施設が協力し、本人らしい最期を迎えられるよう支援します。既成概念にとらわれず、利用者も職員も自分の力を発揮し、普通の暮らしを目指します。職員はマニュアルを極力作らず、状況に応じて・考えて行動する事を目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

レモンの里は、創設者自らが理想とする「生活場所が変われど、家にいた時と同じように生活できる暮らしの再現」と、「こんな風に看取られ、見送られたい終の棲家」を目指している。認知症の高齢者が心穏やかに過ごせるような様々な関係する研究会や協会の構成員となり、認知症自体の理解や生活改善事例研究に取組み啓発活動も行っている。花好きの利用者には、居室から直接庭へ出られるように幅広階段と手すりを作り、「家にいた時と同じように庭いじりができる」と、本人や家族にも喜ばれている。利用者の終末期には、子どもが付き添い泊り込むことができる。最期を一緒に過ごして貰うことでお互いの心の準備を支援し、家族と医療関係者、職員が一つの方向性で看取り、後悔のない最期となるよう支援している。またコロナ禍でも対策の上、恒例の、利用者職員やボランティア演奏家達の数日間の交流コンサートが、果樹と花々に囲まれた広い庭で催され、利用者も家族もお互いの元気な姿を見せている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を『健康とオープン』という短い言葉で表現している。職員それぞれがその言葉を理解して、自分達がどうすれば、理念に合致した介護が出来るかを常に考える体制にしている。	認知症であろうと高齢者がその人らしく普通に暮らせる施設を目指し運営している。職員は、ガーデンでの活動や楽しめる食事の工夫など、コロナ禍だからこそ、「楽しんで貰う」を念頭に理念の実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	家族の会全国研究集会で取組の発信。小規模ケア研究会理事として、広報活動を行っている。津市のホールで交流コンサートを実施予定他、施設での野外コンサートを計画している。	広い庭に近所の人や子どもが自然と立ち寄れる環境を作り、ネットを活用して種々の交流情報の発信を行っている。野外コンサートを開き、地域住民や小学生、新旧利用者の家族や多くの演奏ボランティアの人々との交流がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ガーデンをオープンにしておき、ブランコ・鉄棒を新設し、地域の人々の公園としても利用していただけるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナの影響で会議の情報発信方法を変えている。個別の構成員に対しては報告形式として対面以外の方法を中心に情報発信・継続した交流を行っている。	コロナ下、書面での報告形式で情報発信をしている。写真を活用して見える化し伝わり易い工夫をしている。FAXや返信用封筒により、会議構成委員から意見や感想を募り、サービス向上に繋げる取組を行っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	小規模ケア研究会役員として、津市との防疫体制構築の連携づくりを行っている。代表者が介護専門学校の講師をし、人材の育成をしている。実習生の受け入れも行っている。	津市担当者とは、気軽に連絡・相談できる関係である。津市の小規模ケア研究会や地域密着型サービス協議会及び日本認知症グループホーム協会等の構成員を引き受けるなど、積極的に働きかけ相互に協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は玄関・居室を無施錠としている。職員からは、その原因が把握できない行動をとられる方も見えるが、本人にとっては、目的のある重要な行動をして見えるのを理解し、自由な行動をしていただいている。	身体拘束や虐待に繋がらないケアを目指して、日頃から一人ひとりの具体的な行動についてその意図を話し合い検討し、職員の理解に繋げている。また、職員の対応が身体拘束や虐待につながっていないかも検討している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待については、何が虐待に当たるかということと、その原因・要因について平素から職員間で話し合っている。十分に理解できるまで単独での介助はしないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理職は成年後見制度の研修を受講済。成年後見制度を利用した方の、メリット・デメリットについても経験している。成年後見制度は正しく使うことが大切で、その方向性を家族・親族と話し合っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者家族の希望を叶えるようにしている。自宅からの持ち込み物の希望を尊重し、家具など本人の希望に沿って、自宅から搬入・購入などしている。利用料については上限を明示して、安心感につなげている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族にとっても、本人にとっても「安心」という言葉が一番大切と考えている。安全に走るのではなく、「安心」を提供するように努めている。	コロナ禍でも、利用者の状況に合わせて部屋や窓越しでの面会は可能で、現場職員、管理者、経営者など役職関係なく顔を合わせ言葉を交わし、意向等を聞き出している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のケア会議と、連絡票を活用している。責任者は常にホームにいて、日常的に職員と話し合っている。業務用品などは、職員が話し合っ決定している。職員の提案により、パワースーツ(重量物を扱う補助具)を導入予定。	連絡票などを活用し、職員の率直な意見や疑問を聞くように努めている。ケア会議では、意見交換が活発に行なわれ、即時決定・実行を目指している。経営者も参加するので早期に方向性を決め、職員からの意見が反映されやすい仕組みとなっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各人の日常生活を大切にしたい、休日・勤務時間の希望に沿うようにシフトを組んでいる。職員は利用者目線で考慮し、必要と思われるものは、職員自身の判断で購入・調達するシステムとしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	資格取得を進めているが、資格の有無だけではなく、日頃のケアの仕方や考え方の把握に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	三重県地域密着型サービス協議会の役員として活動。他事業所と連携、入居希望者の相互紹介・余剰品の交換・防災用品の共同購入など行っている。三重県福祉セミナー実行委員、小規模ケア研究会役員		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人と話し合う機会を持ち、家族とも事前に希望を聞くこととしている、また、レモンの里の看取り方針、外出などの実施についても説明をし、本人の希望が叶う方法を互いに共有するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族と十分な聞き取りをして、対応策を話し合っている。看取り実績・内容を開示することで家族の安心を図っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の希望を叶える配慮。例:Aさん…花作り用に、居室から直接ガーデンへ出られる幅広階段と手すりを作成した。ベッド・家具など本人の希望に沿って、自宅から搬入・購入などしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員用の部屋というものがなく、食事やトイレなど利用者と同じ場所を使用している。名札や制服もない。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設行事には家族にも参加いただき、介助を共にすることで、ともに考える機会になっている。旅行・外出は家族にとって大切な『思い出作り』となっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	なじみの人との面会には、ガラス越しではあるが、時間や事前連絡の制限を設けず、いつでも来ていただける環境としている。	コロナ対策のもと、時間や連絡に制限を設けず馴染みの人が気楽に訪問できる雰囲気や職員対応を心掛けている。看取り期の人には、家族や親族に居室内での面会や付添を勧め、双方心残りの無い時間を過ごせるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホールでの席の配置を工夫し、プライベートな空間を作りながらも、お互いの存在を意識できるようにしている。職員が介在しながら孤独感を感じないように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終末期になっても、ホーム内で看取りをすることを原則としており、共に暮らした人々の見送りとして手作りの葬儀を行っている。また、毎年5月に家族に集まっていただき慰霊祭を行って関係性を維持している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者のペースで生活できるように努めている。なるべく利用者に職員側が合わせて動く。例えば起床、就寝・食事時間が利用者によって異なるなど。	職員は、利用者一人ひとりの思いや症状の理解に努め、利用者本位のペースでの「望む暮らし」の支援に努めている。アンケートには、「ご飯や庭での自由な時間等、家にいた時の様に過ごせている」と言っており満足している」等の記述がある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族や本人からの聞き取りで情報を得る努力をしている。育ちや仕事、趣味趣向や食べ物の好き嫌いを知る事が暮らしを支える上で重要だと考えてる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一律的な日課によるサービスでなく、個々の方に寄り添った日常生活、個別性を尊重した生活の場を提供することで自然と利用者さんの身体機能・精神世界が理解できる。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々、本人・家族・関係者と話せる環境にしており、利用者さんの状況に応じた対応をとることとしている。毎月のケア会議では基本的な方針を定め、日々の変化に対応できるケアプランを作成している。	精神的なケアにも力を入れ、本人の思いや言葉を重視し、ケア会議を通じてケアプランを作成している。入院時のカンファレンスには職員・家族が参加、本人・家族の希望を病院に伝え、退院後のケアプランに反映している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの記録は、利用者さん一人一人に対応した項目を配置した個別書式としている、介護計画が日々の実態に即した記録となっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	生活を支えるグループホームと云う観点からリハビリ・医療・外出などの自然な形での支援を行い、職員が直接、医師・医療関係者と話し合い、本人・家族・職員との調整役を担っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	往診・訪問歯科などは、随時対応いただける対応をしており、Drとの関係でもなじみになっていて、本人・職員がDrに希望を伝える自由な発言をしている。安心が安全を支えるものと認識している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診時には管理職の職員が必ず付き添うこととして、介護職としての専門性をもって医師と治療プランを検討している。	医師との信頼関係が保たれており、利用者の日常・病状を熟知した職員が同行し、直接Drと話し合うことで適切な診療・投薬を含む医療を受けられるよう支援し、調整役を担っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤看護師2名在籍。職員とは面談・Tel等で随時意見交換ができています。看護師は平時の医療相談・入院時の病院・受診手配などを担当。また、専門的な爪切りなども担当している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には担当医、家族と連携をとり情報交換や相談を行っている。カンファレンスにも同席している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居希望時から、看取り方針を説明して了解いただいている。実績を説明することで家族にも積極的に援助している。 基本方針は定めるが、家族の意向の変化にも対応してかかりつけ医と協調し、看取りに取り組んでいる。	終の棲家としてターミナルケアや家族の心のケアにも力を入れている。終末期には、家族も共に過ごし交流時間を持って貰い双方心の準備ができるよう支援している。施設葬や慰霊祭には利用者も参加し、「同じように見送られたい」と言っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	摂食・入浴・排泄時に急変や事故は起こりがちで、注意すべきポイントについて職員に周知している。すべての職員が完璧な対応ができるわけではないので、異変時に複数の職員が対応できる体制をとっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災・地震対応用としてガーデンの一角にビニールハウスを設置してある。ビニールハウスを活用するように資材も準備されている。水害には隣接する有料老人ホーム2階を使用する。	利用者の重度化に伴い、避難行動自体が危険に繋がるため、災害時の一時避難は、広い庭の隅に設置されたビニールハウスで、自家発電機を設置して。水害時には隣の老人ホームの2階を利用する準備ができています。	入居者のADLの低下により、移動自体も困難になってきている。消防署との相談も行い施設内に留まることも検討する必要がある。安全に留まれる具体的な対策の検討も望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員同士の会話時に利用者氏名・作業内容を他の利用者の前で大声で話したりしないようにしている。排泄介助時は特に注意を払っている。	家族の話や日頃のアセスメントから得た「その人らしさ」を尊重し、普通のお年寄りと同じような穏やかな暮らしが送れるように支援している。安全上の理由で個室にカメラを設置しているがプライバシーに配慮し、家族の同意も得ている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	重度化によって、自己の希望を表現できない方が増えているが、以前の好みなどを把握して支援している。表情やしぐさなど些細なところから読み取っている。身の回りなどできる方は思い通りにされている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日課・手順書などを作成せずに、個々の人が自分のペースで起床・就寝。食事時間も朝は起床した人から順次とっていただいている。本人の希望に沿ったほうがスムーズに援助ができる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	美容師資格職員がいて、常時整髪している。いつでも面会・外出ができる服装で過ごしていただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	リハビリはコミュニケーションの機会であると考えて、一部の利用者には食事の下ごしらえなどをしていただいている。包丁などは上手に使われる。	市場で求めた旬の食材を、職員と得意な利用者が調理し、準備の音や匂いに囲まれご飯を待っている利用者がいる。職員と一緒に食卓を囲み同じものを味わっている。食材がそれと分かるように本人の目の前でほぐし潰すなど、食べる喜びを感じて貰う工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量・バランスを職員側が決めてしまうのではなく、食事は楽しむものだという考えで、必要量は確保しながら本人が望むようにとっていただいている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で歯磨きをされる方も見えるが、職員がチェックするなどしている。訪問歯科を利用し、定期的に専門的な口腔ケアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	重度化に伴って、紙オムツ類が多くなっている。職員は、その人の習慣や、体調を見て、個々に合わせた支援をしている。	トイレに座ることもままならない利用者が増えたが、意思表示が出来ない利用者のオムツのサイズや交換のタイミングなどは一律ではなく、一人ひとりの体調やリズムを考慮して職員間で話し合って決め支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食べる意欲を引き出すとともに、運動をしながら体調を整えている。食材の工夫も行い、薬に頼らない配慮をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	『誰もが一番風呂』、一人ひとり湯を入れ替える個浴としてゆったりと入浴していただいている。二人介助・機械浴も一部実施して安全策をとっている。入浴時間は決めておらず介助を要しない利用者ご自分の判断で出入り。浴室で洗濯をしている方もいるが自由にしてもらっている。	重度化に伴い、二人での介助や機械浴等で支援している。入浴の目的は、清潔の維持と心のリラックスと捉え、一人ずつ湯を入れ替え、ゆずや季節の植物の湯なども実施している。長風呂の方の入浴日の時間のやりくりで苦勞しつつ支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自分で動ける方は、自由に起床・就寝している。体力を維持するためにも午睡は有用であるので、ホールのソファや居室で適宜休んでいただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	日頃の服薬と、その効果について職員間で話し合っている。医師の指示通り服薬するのが目的でなく、薬の必要性についても考えながら医師と連携をとって支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	居室・ホールのテーブルには種々の書籍を配置。また、楽器・昔なじみの道具や玩具を配置していつでも手が伸ばせるようにしている。さりげなく職員が歌いだすことで、一緒に歌われるようになっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ホール・居室の大きな掃き出し窓から外が眺められ、室内には風景写真などを配置して、散歩や、外へ出たいと思う環境を作っている。家族や地域の人々が参加する交流コンサートやふるさと訪問にとりくみ、本人の希望の表出につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在個々の人が必要とする物品はホームで調達できるので、お金の必要性が見出せない。金銭所持の希望があれば対応することとしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍のために家族とは距離感が出ているが、平素は家族が頻繁に来訪されている。年賀状など届いた手紙は本人に読んでいただいている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間に肉筆の絵・つる植物・観葉植物・手近にある楽器・書籍類などがあり、利用者さんの気持ちを和らげている。入居者及び職員の五感を活用した既存概念にとらわれない居心地の良い空間作りを目指している。	デッキやガーデンに利用者がいつでも出られるようにしている。楽器や本、観葉植物があり、介護施設とは思えない生活感がある。職員手作りの大きなテーブルは、他者の視線を気にせず寛げるよう設計されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	職員が話し合っ、入居者さんの居心地の良くなるラウンドテーブルを作成して使っている。向かい合わせの人の直接の視線を遮り、人によって隣席との距離感をとって、落ち着けるプライベート空間を作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設らしくない・なじみの物品や写真に囲まれたやわらかい空間になっている。本人・家族の思いのこもった家具・調度品を配置して家族も落ち着ける空間になっている。	電動ベッドや症状に合わせたベッドを設置し、家にあつたものや家族の写真等でのなじみの雰囲気による落ち着ける空間と、施錠していないガラス窓が緊張感をなくし寛げるものとなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	『危ないから撤去する』という考えを排除し、それぞれの利用者さんにとってわかりやすく、安心して使える、落ち着ける空間づくりをしている。わかりやすい障害物や、適度な段差は自立生活に欠かせない。		